

# 探究学習の現場から

地域の中で学び  
地域に気づきを与える

子どもたちがお年寄りや遊んだら勉強したりできる「子ども食堂」、犯罪が起きやすい暗い地下道に市民と共に明るい壁画をペイント、山間部を盛り上げるお祭りや観光イベントの実施——これらは商業科の生徒が取り組む「地域人教育」の活動の一例です。「地域人」とは、「地域に愛着を持ち、

## 高校・行政・大学が連携し、地域全体で若者を育てる 三位一体の「地域人教育」を展開



地域人教育主担当  
**國松秋穂**

くにまつあきほ ●教職歴18年。同校に赴任して9年目。文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」主担当も兼務。

### 飯田OIDE長姫高校の探究学習

<b>内容</b>	「まちじゅうが教室」をコンセプトとし、高校生が地域活動に取り組む中で、「地域を『愛』し、地域を『理解』して、地域に『貢献』する人財(たから)」を育てる	
<b>対象・期間・時数</b>	・商業科の生徒全員が対象。1、2年次は「地域人教育(学校設定科目)」、3年次は「課題研究」の授業で実施	<b>体制</b> ・推進委員会が全体を企画し、商業科の教員全員が指導 ・飯田市、松本大学との協定の下、地域のサポートを受ける
<b>テーマ例</b>	「子ども食堂」を通じた子どもの貧困対策・居場所づくり、駅前地下道の防犯対策、山間部の関係人口の拡大 など	<b>評価方法</b> ・取り組み状況はルーブリックで評価し、学習成績に反映 ・活動成果は学期ごとのレポート、最終活動報告書で評価

### 「地域人教育」の3年間のカリキュラム

1年次●基礎	2年次●応用	3年次●実践
<b>目標</b> 地域を知る	<b>目標</b> 地域で活動する	<b>目標</b> 地域の課題解決に向け行動する
<b>1・2学期</b> フィールドスタディ 飯田市や松本市の中心市街地を歩き、街の人から地域の魅力や課題を教えてもらうとともに、自分たちでも発見する。 <b>3学期</b> 地域に関する講演 松本大学の教授や、地元の経営者、金融・行政の専門家から地域連携について学ぶ。	<b>学びの積み上げ</b> <b>通年</b> 地域イベントに参加 地元で行われるイベントに運営者として積極的に参加することで、世代を超えて協働する力とコミュニケーション能力を磨く。年2回のフィールドワークが必須。 <b>2・3学期</b> 商品開発・情報発信 地域資源を生かした商品の企画・開発の取り組みと、POP、広告、プレゼンテーションなどの情報発信について学ぶ。	<b>学びの積み上げ</b> <b>1・2学期</b> 地域連携企画・実践 地域課題を発見し、地域資源を生かした企画を立案。それを地域と協働して実施する。市民向け、観光客向けなど企画は多岐にわたる。 <b>通年</b> 地域への提言活動 地域の魅力の発信方法や問題の解決策を市長や地域へ提言、意見交換することで、次回や卒業後の実践に生かす。



▲(写真上)地域人教育には商業科の教員全員が関わる。(左下)1年次のフィールドスタディの様子。(右下)犯罪防止のために、駅前の地下道に明るい壁画を市民と共にペイント。

\*学校資料を基に編集部で作成。

地域を学び、地域に貢献する「人財」です。生徒たちが地域の人の輪に入り、さまざまなことを見聞きし、その中で発見した地元の課題解決に取り組む本活動は、すでに10年以上続いています。

きっかけは、工業科との統合前の授業で、高齢者のために食品のリヤカー販売を行ったことでした。「買い物弱者をサポートする」という課題に取り組んだ生徒は、地域の生産者や流通の問題にまで目を向けるようになりました。当時、商業科では「就職に有利」という理由から、資格取得に偏った指導をする傾向がありました。しかし、商業教育は本来、実務教育であり、社会との結びつきを強く意識すべきものです。「地域で活動し、視野を広げ、社会で求められる力を育むこと」こそ、本校で行うべき教育だろうと考えたのです。さらに本校と松本大学、飯田市が結んだパートナーシップ協定が追い風になり、地域全体で生徒を育む教育が実現しました。

この「地域人教育」は3年間でかけて取り組みます。「地域を知る」をテーマに掲げた1年次は、松本市と飯田市でフィールドスタディを実施。中心市街地を歩き、街の人から地域の魅力や課題について聞き取り調査を行い、そこで発見

に受け取るのではなく、生徒が地域の現状をどう見つめ、何に危機感を抱き、どこに魅力を感じているのか、地域に気づきを与えることにもつながるはず。活動を通して、生徒の自己肯定感や非認知能力に対する自己評価が伸びました。また、以前は3割もなかった、就職した卒業生の3年以内離職率がほぼゼロになりました。これは高校段階から地域社会に参画する意識が芽生え、準備ができた証と言えるでしょう。

**どこで生活しようとも地域を元気にする若者に**

本校が地域人教育を長年続けてきたのは、やはり地域や大学の協力が大きいと思います。飯田市は住民主体の活動が盛んで、市内20地区全てに公民館があり、公民館主事に地域と本校との仲介役を担っていたりしています。高校教員には異動がありますが、公民館が間に立つことで商店街や地元企業とのつながりが保たれています。また、松本大学には

## 大学への期待

### 生徒が多様な考えに触れられる 交流機会の増加に期待

高校時代にさまざまな年齢、立場、考えの人々と接することは、多様性を受け入れる土台を築くことにつながります。実際、「学輪IIDA」での大学の先生、大学生との交流は生徒にとって貴重な時間になっています。一方通行の出前講義ではなく、教育的な交流機会をぜひ増やしていただきたいですね。

調査のやり方や、個々の研究活動に対するアドバイスで協力してもらっています。飯田市には大学はありませんが、「学輪IIDA」というしくみがあります。これは、フィールドスタディなどで飯田と関わった県内外の65大学・教育機関で構成される連携会議です。大学教員と大学生、地元の高校生が参加するフィールドワークを主催しており、この機会を活用して、地域人教育をより充実させたいと考えています。

われわれは生徒を地元で縛りつけるつもりはありません。しかし人口減少が進む中、飯田市の課題は全国共通の課題でもあります。将来、どこで生活するとしても地域に関心をもち、地域を元気づけられるような若者を、地域人教育で育てていきます。

きつかけは、工業科との統合前の授業で、高齢者のために食品のリヤカー販売を行ったことでした。「買い物弱者をサポートする」という課題に取り組んだ生徒は、地域の生産者や流通の問題にまで目を向けるようになりました。当時、商業科では「就職に有利」という理由から、資格取得に偏った指導をする傾向がありました。しかし、商業教育は本来、実務教育であり、社会との結びつきを強く意識すべきものです。「地域で活動し、視野を広げ、社会で求められる力を育むこと」こそ、本校で行うべき教育だろうと考えたのです。さらに本校と松本大学、飯田市が結んだパートナーシップ協定が追い風になり、地域全体で生徒を育む教育が実現しました。

この「地域人教育」は3年間でかけて取り組みます。「地域を知る」をテーマに掲げた1年次は、松本市と飯田市でフィールドスタディを実施。中心市街地を歩き、街の人から地域の魅力や課題について聞き取り調査を行い、そこで発見

した気づきを発表します。2年次は「地域で活動する」をテーマに据え、地元で行われるイベントにボランティアとして参加し、自分たちでブースの企画や運営などを行います。高校生の年代では、教員以外の大人とのコミュニケーションが成長につながるケースが多々あることから、幅広い年代の住民と協働し、社会性の経験値を上げるのが狙いです。3年次は、冒頭に挙げた実践例のように、フィールドワークで地域課題を発見し、グループでそれを掘り下げて考え、解決案を企画して地域と協働して実践します。

特に大切に行っているのが、3年次の活動報告書の作成と地域への提言です。商業教育では、探究活動が注目を浴びる以前から、実践的な教育が盛んだったのですが、「実践して、振り返りをやっておしまい」というケースが多く見られました。そこで地域人教育では、実践に加え文献を調べて課題をきちんと分析し、文章としてまとめてプレゼンするスキルも磨かせるようにしています。

これは、地域への恩返しの意味もあります。高校生が地域で活動すると、どうしても住民に迷惑がかかります。報告書を作成することで、われわれが地域から一方的

取材・文/本間学